

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語レシテーション・スピーチ指導のあり方
Author(s)	達川, 奎三
Citation	広島外国語教育研究 , 24 : 167 - 177
Issue Date	2021-03-01
DOI	
Self DOI	10.15027/50454
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050454
Right	Copyright (c) 2021 広島大学外国語教育研究センター
Relation	



英語レシテーション・スピーチ指導のあり方

達 川 奎 三

広島大学外国語教育研究センター

はじめに

筆者は立場上（職務上）、中学生や高校生が参加する「英語レシテーション・スピーチ大会（コンテスト）」の審査員を依頼されることがある。その際、大学教員ということもあり、大会の審査委員長を務め、閉会式では講評を述べることが多い。また、このような社会貢献活動から「英語レシテーション・スピーチ指導のあり方」というテーマで、講話（ワークショップ）をすることもある。本稿では、これまでの教員や審査員としての経験や知見をまとめ、小論が中学や高等学校現場の先生方の「（大会や行事に向けた）英語レシテーション・スピーチ指導」のあり方を考える一助となれば幸いである。

1. レシテーション・コンテストのスピーチ・コンテストの現状（地区、地方大会を中心に）

中学生・高校生を対象としたレシテーション・コンテストやスピーチ・コンテストは、英語科教育の一環としてほぼ半世紀は実施されているのではないかと推測する。筆者が高等学校教員になった約40年前に広島県ではスピーチ・コンペティションがあったと記憶しているし、約30年前には担当クラスの生徒が外国語指導助手についてスピーチを行い、優勝（広島県知事杯受賞）をし、副賞として約1ヶ月間の米国短期語学研修をいただいた。まずは広島県の英語レシテーション・コンテストとスピーチ・コンテストを中心にまとめてみることにする。

1.1 中学生レシテーション・コンテスト

筆者の勤務する広島県の場合、2019年12月7日に第28回広島県中学校英語暗唱大会が開催された。本大会の目的は「英語教育の振興を図る一環として、生徒の英語学習に対する興味関心の喚起と表現力の向上を目指し、より積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する」ことであり、1992年から開催されている。県レベルではこのようになっているが、それ以前にも学校内や地区（地域）レベルで英語の暗唱が推奨されていたことは想像に難くない。現在では、県内を8つの地区に分け予選を行っている。ただし、2020年度は新型コロナウイルス感染防止のため、中止となった。

暗唱部門の審査は Pronunciation 30点、Rhythm and Intonation 30点、Delivery 40点の計100点満点、スピーチ部門の審査は English 30点、Delivery 30点、Content 40点の計100点満点となっている。暗唱部門は審査員全員（計11名、うち7名は広島県中学校教育研究会英語部会の理事を務める教員）の総得点、スピーチ部門は審査員4名（大学教授、県教育委員会指導主事、ALT 2名）によるランキングオーダー制とされている。また、2019年度からは、帰国生徒のみを対象としていたスピーチ部門に「一般生徒部門」が加わり、合計3つの部門ができた。また、近年では関西や関東地区などで主に私学の主催による英語プレゼンテーション大会が開催されており、広島県でも将来は「プレゼンテーション」部門も設けられるかも知れない。ただし、この大会は県レベルで

終わり、地区大会や全国大会などの上位大会はない。英語レシテーションの練習を通して学習への興味関心の喚起、また裾野を広げるという観点から言えば妥当であると筆者は考える。

1.2 高校生レシテーションおよびスピーチ・コンテスト

広島県では従前、広島国際文化財団（中国新聞社内）が「高校生英語スピーチ・コンペティション」を開催し、予選には県内から多くの高校生が応募した。本戦（決勝大会）は平和公園内の施設で行われ、レベルは当時（1990年前後）としてはかなり高かったと記憶している。幸い筆者が指導した生徒が2人決勝大会に進むことができたが、決勝進出発表者のテーマは今日でも耐えうる社会的・グローバルな話題も多かった。残念ながら、財団からの資金援助が難しくなり、十数回の開催で途絶えてしまった。

その後、熱心な現場の先生方の努力により、形を変えて広島県高等学校教育研究会英語部会の主催で、「広島県高校生英語スピーチ・レシテーションコンテスト」として「復活」した。目的は、(1)授業における音読活動の成果を発表する場を提供することにより、コミュニケーション能力の育成を図る、(2)日常生活の身近な話題や幅広い話題について自分の考えなどを英語で発表する機会を提供することにより、コミュニケーション能力の育成を図る、となっている。2020年度には第17回を（無観客で）開催するに至った。また、本大会のスピーチ部門上位2名は中国ブロック予選大会に進み、さらにそのブロック大会での上位2名は「全国英語スピーチコンテスト」（全国英語教育研究団体連合会主催）に出場する。本全国大会は2019年度には第13回を国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）にて開催したが、2020年度は社会状況に鑑み開催中止となった。

「広島県高校生英語スピーチ・レシテーションコンテスト」は、スピーチ部門とレシテーション部門の2つがある。参加資格は、スピーチ部門は「広島県の国公立私立高等学校及び高等専門学校（1～3学年）などの学校に在学する生徒、外国籍の生徒も参加できる。ただし、留学生は参加できない。」となっている。他方、レシテーション部門は「①広島県の国公立私立高等学校及び高等専門学校（1～3学年）などの学校に在学する生徒、英語を母語としない高校生で、大会当日までの過去3年間に海外居住期間が連続半年以内であること。②昨年のレシテーション部門で最優秀賞を獲得した生徒は今年度の同部門の参加はできない。」（原文のまま）となっている。レシテーション部門は「高校1年生の部」「高校2・3年生の部」の2つがあり、制限時間は3分であり、その制限時間を超えた場合には減点の対象となる。スピーチ部門はその年の主題に基づきタイトルは自由に決めることができる。（第15回の場合は「私の主張」であった。資料1参照。）制限時間は4分30秒以上5分30秒以内とされている。制限時間に満たなかったり、超えた場合には減点の対象となる。

予選では、英語部会事務局に申込用紙（エクセル文書）と原稿（ワードで作成）をメールに添付して送付し、音源（かつてはカセット・テープで、最近ではCDなどで）は郵送することとなっている。各部門で10人の本選出場者が決定される。第15回（2018年度）大会には、スピーチ部門に31編、レシテーション部門は1年生の部に50名、2・3年生の部に19名の応募があった。審査基準は、スピーチ部門がEnglish (30), Delivery (20), Content (50)で、レシテーション部門はEnglish (20), Delivery (35), Content (10)となっている。レシテーション部門のContent (10)は意外に思えるが、発表素材は高等学校検定教科書から生徒が自由に選択できることになっているので（資料2参照）、題材が聴衆に聞かせる情報としてふさわしいか、また、発表生徒の人柄や

人間性にマッチしているかなども加味するためであろう。順位は得点を集計し、それをもとに審査委員が「協議して決定する」ことになっている。これはおそらく、県大会に続いて地区ブロック大会や全国大会が控えており、それらの大会で入賞できるかなどを多方面から判断したいとの考えからであろう。

2. 英語指導としてのレシテーション

2.1 音読

英語科の指導において、生徒に声に出して読ませることは日常的に行われている。その目的を村野井他（2012）は次のようにまとめている。

音読のねらいは単に内容を確認するという理解の面に留まらない。音読をしっかりとすることによって、①単語を音声で瞬間的に理解することができる（リスニング）、②既習の言語項目を口頭で運用できるようになる（スピーキング）、③内容を考えながら、文を区切り、重要な語句を強調して読むことができるようになるため、英文の読み方を身に付けることができると考えられる。読みのスキルを高め、英語を音声で使いこなせるようにするため、音読は効果的なのである。（p.41）

音読の代表的なものとしては、

- ・一斉読み（chorus reading / choral reading）＝教師が英文を一文ずつ（または意味のまとまりごとに）読んで、それについて生徒が一斉に読むこと。
- ・バズ・リーディング（buzz reading）＝生徒全員が自分のペースで声に出して読む。一斉読みの後に行うことが好ましい。
- ・個人（指名）読み（individual reading）＝教師が生徒を何人か指名して音読させ、良かった点、改善すべき点をコメントする。

などがあげられる。また、発展的な活動としては「リード・アンド・ルックアップ（read and look-up）」、つまり、教員の“Read”という指示で、生徒が文末や区切りまで読み、“Look up”という指示で顔を上げ、その情報を繰り返す、発展的な音読活動もある。

古くは國弘（1970）が「只管朗読」というものを提唱している。只管朗読とは、曹洞宗の「只管打座（しかんたざ）」（とにかく黙って座る）という言葉に由来しており、意味が分かったものをひたすら音読するという意味である。國弘は、教科書をひとレッスン200～300回読んだそうである。日本の同時通訳者としての草分け的存在であった國弘が、徹底的な音読で英語を習得していった過程を窺うことができる。他方、近江は（1996）「音読をとにかく何度もしなさい。その次に自分の方に話しを引き寄せて語ってみなさい。これだけでも着実に進んでいけば、日本人の英語力は、現在よりもはるかに伸びるであろう」（p.313）と四半世紀前にも提言している。筆者自身、中学・高校生時代には一度も英語母語教員の授業を受けたことがなく、ようやくカセット・プレイヤーが登場し始めた時代であったので、奇しくも國弘や近江が推奨しているような方法で英語を学んだのであろう。

2.2 シャドーイング

シャドーイングは、英語を聞きながら、ほぼ同時に音を真似して発音する英語学習法のことである。音声知覚の自動化やリスニング・スキルの向上、音声調音の自動化などの言語習得に効果がある練習法とされている。門田（2007）に、シャドーイングの目的や、どのように音読と組み合わせるトレーニングするのが最も効果的であるかなどが、最新の脳科学の成果も交えて詳しく解説してあるので参照されたい。小論は、レシテーションやスピーチ指導について考えることが主テーマであるので、良質の参考文献の紹介にとどめることとする。

2.3 レシテーション

レシテーションは、暗唱（recitation）することであり、英語の情報を空で覚えてしまうまで何度も読んだり聴いたりする練習法のことである。歌やピアノを何度も歌ったり弾いたりして、自分のものにして発表することを「リサイタル（recital）」と呼ぶことから、言語習得におけるその効果も分かるというものである。「暗唱する」ことの効用は、次の節で述べるようなことがあるとされている。

3. 「暗唱する」ことの効用

一般的に、レシテーションには次のような教育的効果があるとされている。

- (1) 発音・イントネーション・リズムの習得に役立つ
- (2) 英語の語彙・文法・語法などの習得に役立つ
- (3) 英語の表現力が養われる

以下、これらを1つずつ吟味することとする。

3.1. 発音・イントネーション・リズムの習得

レシテーション発表などにおける発音指導に関しては、個々の発音も丁寧に行いたい。審査業務をしていて、先生方は生徒に英語独特の音素 [f] [v] [l] [r] [θ] [æ] などとしっかりと指導していると感じることが多い。ただ、語末の [m] [n] [ŋ] などが今一つの生徒が散見される。例えば、

- ・ The people brought kimonos from Japan and made shirts from them.
- ・ Which do you like better? — I like the red one.

といったセンテンスである。実際にはボールド部分は音として聞こえない場合が多いが、舌の接触や唇の閉鎖などの「構え」をしっかりと指導したいものである。音素としての「存在感」が全くないのは良くない。細かなことになるが、[n] という音素は歯茎（alveolar ridge）を使って調音されることを生徒には理解させたい。さらには、母語（日本語）の影響を受けて誤った発音をする生徒も時折見られる。例えば、season, city, music, museum などの [s] [z] の音素である。

次にイントネーションについてである。人間は話すとき、声の高さ（pitch）を上下させる。これをイントネーション（音調）と呼ぶが、これはでたらめに生じるのではなく、いくつかのピッチ・パターンを作る。このパターンは構造と機能の点からの考察が必要だと言われている。音調のパターンの基本形を木村（2003: 35）は次のようにまとめている。

下降調：平叙文、疑問詞で始まる疑問文、命令文、感嘆文など

上昇調：Yes-No で答える疑問文、実質的に疑問文になる平叙文、柔らかい口調で発する平叙文

ただ、イントネーションは話者の心情を映し出すと言われ、上記の基本的音調パターンを逸脱することも多い。それ故、話者である生徒から滲み出す気持ちも尊重し、柔軟性のある指導を心掛けたい。

レシテーションやスピーチ・コンテストで、英語を発表する時に最も重要であるのは「リズム」であると筆者は考える。英語には独特の音声変化（modification）、つまり「連結」「同化」「脱落」「弱化」などがあることは英語教員であれば誰もが知っている。これらの現象は the rhythmic structure of English と呼ばれ、それは the principle of least effort（スムーズな発話をするために最小限の労力を使う）に起因している（Brown 1990: 150）。

例えば、次の例を見てみよう。どの部分を強くゆっくりと発音し、どの部分を弱く素早く発音するように指導するだろうか。

May I speak to Becky, please?

I have to go to the station right now.

We learn English at school in Japan.

各文に含まれる「連結」「同化」「脱落」「弱化」といった音声変化に留意して、

May I **speak** to **Becky**, please?

I have to **go** to the **station** **right now**.

We **learn English** at **school** in **Japan**.

のようにボールド（太文字）部分を強くゆっくりと発音し、その他の部分は弱く素早く発音するように指導するであろう。これにより英語独特のリズムが生まれる。

英語の音声変化については、一般的に次のようにまとめることができる。

- ・連結（linking/liaison）：単語と単語の音がつながること。英単語は、一つ一つ独立して発音されずに、つながって発音されるため、単語の切れ目がわかりにくくなる。
- ・同化（assimilation）：単語と単語の音がつながって別の音に変化すること。発音しやすくするために変化させるが、音を変化させることによってスペルと違う音になる。
- ・脱落（elision/reduction）：自然な会話スピードでは発音しなくなる。ゆっくりと発話した時には発音される音が、省略され、発音されなくなるので単語が聞き取りにくくなる。
- ・弱化（weak form）：機能語にあたることが多い前置詞、接続詞、代名詞など、辞書を見ると、発音が2種類以上載っていることがある。強勢の発音（または強形）と弱勢の発音（または弱形）である。機能語などは弱形で発音されることが多い。

英語のリズムを生み出すこれらの音声変化に関する知識や指導は、「話す」ことだけでなく、英語を「聞く」際にも多に役立つことは言うまでもない（天満 2000; 吉田 1989）。

3.2. 英語の語彙・文法・語法などの習得

昔から言語（外国語）学習は「習うより慣れよ（Practice makes perfect.）」と言われている。レシテーション発表を目指して、正しい文を繰り返し、意味を考えながら、伝えようとする練習を根気強く行うことが、語彙・文法・語法などの言語学的知識（linguistic knowledge）を強化することを我々は経験的に知っている。前述のピアノのリサイタルの例を繰り返す必要もあるまい。何回繰り返せば語彙・文法・語法などが定着・習得できるかについては諸説あるが、繰り返しが一番の近道であり、王道であることは誰にも否定はできない。

3.3. 英語の表現力の養成

レシテーションに際して、大切にしたいことはいくつかあるが、筆者は「聴衆との相互作用」を意識することがもっとも重要であると考え。換言するならば、独りよがりにならずに、聞いている人がいることを意識することである。レシテーション発表は聴衆に何かを伝えることができこそ価値があるのである。いわゆる delivery の力量である。この点について近江（1996）は「（通常の音読ではなく）顔を上げてしかるべき相手に語るつもりで発声し体も作動させると、とたんに言葉が飛翔する感覚が体内に生ずる。つまり『読む』から『語りかける』に変化する。」(p.140)と説明している。聴衆がいることや伝えることの大切さを理解できれば、「声の大きさ」「間合い」「目線」「顔の表情」「ジェスチャー」などを意識（工夫）できるようになるであろう。「声の大きさ」「目線の配り方」については、ここで改めて述べるまでもないと考えるので、外国語学習の一環としてのレシテーション発表における「間合い」について少し考えてみたい。

「間合い」を取るとは、聴衆が情報を「咀嚼」する時間を確保すると言い換えてもよい。例えば、次の4つのセンテンスからなる文章を読む（暗唱する）とする。

- (1) Jane was invited to Jack's birthday party.
- (2) She wondered if he would like a teddy bear.
- (3) She went to her room and shook her piggy bank.
- (4) It made no sound.

それぞれのセンテンスの後で、聴衆が意味（状況）を咀嚼するための若干の間合いが欲しい。(2)を聞いて、何か「present」をJackにあげようと思ったのかな、(3)を聞いて、自分の部屋に上がり piggy bank を振ったのはプレゼントを買うための「money」があるかを確認したのかな、そして、最後の(4)では貯金箱の音がしなかったので、Janeはきっと「sad」「disappointed」な気持ちになっただろうなという言外の情報を想像（推論 infer）させる「間」を取るようにさせたい。文章中には「present」「money」「sad」「disappointed」などの単語は登場しないが、聴衆がこのような背景知識をうまく活性化させることができれば「相互作用」が成立したと考えてよい。また、聴衆にうまく情報が伝わっていれば、先を推測する（predict）こともできる。

Ken was very hungry. He went into the kitchen and opened the (*).

*=fridge, refrigerator

我々は自分が予測した情報がその通りに入力されれば最も理解が促進され、そうでない場合は理解を修正する必要が生じると言われている (“a psycholinguistic guessing game” by Goodman 1967; Carrell et al, 1983)。

最後に、「顔の表情」「ジェスチャー」は、自然なものが好ましいと思う。レシテーション・コンテストでは、ほとんど全ての生徒が緊張し、自然で滲み出る顔の表情やジェスチャーは伴いにくい。自分の言葉として発することができるように練習を納得するまで重ね、自分を信じてリラックスすることが肝要であろう。生徒への指導に際しては、あまり細かな指示は控えて、以下のようなことに留意すれば良いのではなかろうか。

目線＝一点ばかり見つめず、全体を見渡す

顔の表情＝リラックスして、内容に即した表情をする

ジェスチャー＝伝える内容を補完するために使う

4. 英語指導としてのスピーチ

4.1 スピーチとは

辞書で「speech」を引くと、“a talk, especially a **formal** one about a particular subject, given **to a group of people**” (『ロングマン現代英語辞典』) “the **expression of** or the ability to express **thoughts and feelings by articulate sound**; a **formal** address or discourse delivered **to an audience**” (『オックスフォード新英英辞典』)などと説明されている(強調は筆者)。筆者が強調した部分の“formal (talk)” “by articulate sound” や “to a group of people (an audience)” などの説明から、パブリック・コミュニケーション (public communication) に属する発話であることが分かる。いわゆる「言い誤り」「言い直し」「情報の明確化」などが許される、「やり取り」のある発話ではない。

4.2 パブリック・コミュニケーションとしてのスピーチ

スピーチをパブリック・コミュニケーションとして捉えた場合、そのスピーチ行為の目的によって、おおよそ次のように分類できるであろう。

- (1) informative speech
- (2) entertaining speech
- (3) persuasive speech

informative speech とは「知識や情報を与えるためのスピーチ」であり、大学での講義やビジネス・プレゼンテーションなどがあげられる。次の entertaining speech は「出席者（聴衆）を楽しませるためのスピーチ」で、会食などでのスピーチなどが代表的である。最後の persuasive speech とは「説得を目的としたスピーチ」のことで、選挙演説や勧誘などを思い浮かべるとよい。生徒自身に、自分のスピーチはどのような機能が最も強いかを考えさせたい。

4.3 英語科指導としてのスピーチ

今回訂正された学指指導要領を見ると、4技能5領域のバランスに配慮した指導が求められ、とりわけ「話す」技能に関しては英語で「やり取り」「発表」という2つの領域に分けられた。

中学校・高等学校用検定教科書を見ても、その課（レッスンやユニット）で学んだ話題や情報について、「調べ学習」などを行い、伝えたい情報や考え（主張）をまとめ、グループ内やクラスで発表する取り組みが多くなされるようになった。日常の指導は必ずしもスピーチやプレゼンテーションが大人数の前で話すことのみをさしておらず、高等学校学習指導要領解説（p.27）にも「ペアでの発表から小グループでの発表を経て、クラス全体での発表といったように、発表の形態を段階的にして発表の負担を軽減」するなどの配慮が必要であることは言うまでもない。ただし、コンテスト・スピーチにおいては、前節の3つの視点をしっかりと取り入れる必要が出てくる。ここでは主として2つめの entertaining speech を創るための留意点を少し押えてみたい。

entertaining speech とは、「聴衆を楽しませるためのスピーチ」という意味である。ここで entertain という言葉を使っているが、これは決して聞き手（聴衆）を笑わせるという意味ではない。スピーチ・コンテストは教育的で真面目な発表場面であるが、いわゆる「お説教（sermon）」を聴衆（審査員を含めて）は聴きたいのではない。「聴いて良かった」とほのぼのとした感情が沸き上がってくるような話を聞きたいのではなかろうか。そのようなスピーチを書くには以下の3点を考えてもらいたい。

- (1) heart-warming 心温まる話しであるか
- (2) touching 感銘や感動を与える話しであるか
- (3) motivating 人に意欲を湧かせる話しである

スピーチ・コンテストの入賞に関わっては、基本的な英語力（特に音声面）や発表力（delivery）も重要であるが、これらがほぼ同レベルであれば、内容の「情報性」よりも entertainment 性がより重要であると筆者は考える。

なお、英語教育におけるコンテスト・スピーチの効用については、Mikuma (1995) が「スピーチ活動におけるテキストの暗記が『コミュニケーション・レディネス』を上げ、『情意フィルターを下げる』こと」を学術的に報告しており、とても興味深い。

5. まとめ（教育的提言）

小論を書くにあたって、自身の社会貢献の記録を振り返ってみた。高等学校レベルでは、「広島県高校生英語スピーチ・レシテーションコンテスト審査委員（長）」を4回（2006, 2011, 2014, 2018年度）、「中国地区高等学校英語スピーチコンテスト兼全国高等学校英語スピーチコンテスト中国ブロック予選審査委員（長）」を2回（2013, 2016年度）、他方、中学校レベルでは「地区中学校英語暗唱大会」審査委員（長）を2010年度以降に計11回ほど勤めさせていただいている。毎回、どの大会でも感じるものが2つある。それは、(1) 参加生徒の真剣な眼差しと発表態度、そして(2) 大会発表の直前まで熱心に指導された英語教員やALTの御努力と、発表生徒を支えた御家族の励ましと愛情である。審査業務に携わるといつも多くの感銘を受け、また、自身が英語を学び始めた中学・高校時代を思い出す。スピーチやレシテーション大会に参加することを通して、生徒には外国語（ことば）で伝える（表現する）ことの「楽しさ」や「喜び」を経験して欲しいと願う。筆者の専門領域は「スピーチ・コミュニケーション」ではないが、これまでの審査委員としての経験や考えたこと、そして教職生活40年から得た知見をまとめた小論が、学校現場で指導に携わる先生方の一助となれば幸いである。

参考文献

- Brown, G. (1990). *Listening to spoken language* (Second Edition). New York: Longman.
- Carrell, P. and Eisterhold, J. C. (1983) Schema Theory and ESL Reading Pedagogy. *TESOL Quarterly* 17(4), 553-573.
- Goodman, K. S. (1967). Reading: A psycholinguistic guessing game. *Journal of the Reading Specialist*, 6(4), 126-135. <https://doi.org/10.1080/19388076709556976>
- Mikuma, Y. (1995). Speech Communication Factors Affecting EFL Learners, *ANNUAL REVIEW OF ENGLISH LANGUAGE EDUCATION IN JAPAN (ARELE)* 6, 85-97.
- 近江誠 (1996). 『英語コミュニケーションの理論と実際：スピーチ学からの提言』 研究社.
- 門田修平 (2007). 『シャドーイングと音読の科学』 コスモピア.
- 木村松雄 (2003). 「3. 聞くことの指導」伊村元道, 茂住實男, 木村松雄 (編著)『あたらしい英語科教育法 一小・中・高校の連携を資材に』 pp.31-43. 学文社.
- 國弘正雄 (1970). 『英語の話し方』 サイマル出版会.
- 國弘正雄 (1972). 『国際英語のすすめ』 実業之日本社.
- 染谷泰正 (2010). 「英語教育におけるプロダクション訓練の方法論とその理論 ―インプットからアウトプットへの橋渡し― (財)東京私立中学高等学校協会・東京私学教育研究所主催講演会 (2010.11.8.) 講演録」『関西大学外国語学部紀要』第5号収録, 93-132.
- 達川奎三 (2014) 「第11回広島県高校生英語スピーチ・レシテーションコンテスト 7. 審査員長講評」『広島県高等学校教育研究会英語部会 会誌』 pp.58-60.
- 達川奎三 (2017) 「語りかける英語教育第1～6回」『みつむら web magazine』 光村図書.
https://www.mitsumura-tosho.co.jp/webmaga/eigo_kyoiku/detail00.html
- 天満美智子 (2000). 『新しい英文リスニング法』 岩波書店.
- 村野井仁 (2012). 「第3章 英語指導方法：どのように教えるのか」村野井仁, 渡邊良典, 尾関直子, 富田祐一 (編著)『総合的英語科教育法』 pp.25-65. 成美堂.
- 文部科学省 (2017). 『中学校学習指導要領解説 外国語編』.
- 文部科学省 (2019). 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編』 開隆堂出版.
- 安木真一 (2009). 『英語力がぐんぐん身につく―驚異の音読指導法54』 明治図書.
- 吉田研作 (1989). 『英語リスニング上達の方法』 ジャパン タイムズ.
- 令和2年度「第17回広島県高校生英語スピーチ・レシテーションコンテスト」(結果報告)
<http://www.gionkita-h.hiroshima-c.ed.jp/kokusai/R2eigobukai%20resitte-shon.pdf>

資料1.

第15回広島県高校生英語スピーチ・レシテーションコンテストのスピーチ題目

テーマ：私の主張

第1発表者	2年生	Be as human as you can
第2発表者	1年生	To appreciate our school tradition “Freedom”
第3発表者	2年生	Smartphone and consideration for others
第4発表者	1年生	Don’t be complacent!
第5発表者	2年生	Making a better future together
第6発表者	2年生	Finding the path to good relation
第7発表者	1年生	The power of education
第8発表者	2年生	Letting AI’s tomorrow take care of itself
第9発表者	1年生	Eye contact is important, but ...
第10発表者	1年生	What can we do?

資料2.

第15回広島県高校生英語スピーチ・レシテーションコンテストのレシテーション題目

1年生の部		2, 3年生の部
第1発表者	Leonardo da Vinci	An Abundant Well that Never Runs Dry
第2発表者	The Happy Prince	I’m the Strongest!
第3発表者	Love Potion	Malala’s Fight for Education
第4発表者	My Father	A window to Ancient Earth
第5発表者	My Father	A Teenager to Change the World
第6発表者	Landfill Harmonic	Japan Through Foreign Eyes
第7発表者	Beavers, Engineers of the Forest	Malala’s Fight for Education
第8発表者	Love Potion	The Great Dictator
第9発表者	Landfill Harmonic	“Gamification”: Games May Save the World
第10発表者	Encyclopedia Brown	Bonsai Goes Global
		(第9発表者のみ3年生)

ABSTRACT

Helping Junior and Senior High School Students with Contest Recitation and Speech

Keiso TATSUKAWA

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

The article aims to provide some useful pedagogical tips for junior and senior high school English teachers when they help their students with contest recitation and speech, based on the author's experience serving as contest (chief) judge for more than 15 years. First, a short history of recitation and speech contests for secondary schools in Hiroshima Prefecture is summarized, followed by how these contests have been organized and how the contest winners are usually decided. Secondly, the usefulness of recitation practice is discussed from the following three aspects: (1) acquisition of proper pronunciation, intonation, and rhythm of English, (2) acquisition of English vocabulary, grammar, and usage, and (3) development of speech delivery skills. Next, several important perspectives are presented for making good formal speeches in tournaments. Giving a formal talk is not easy for many people, especially young secondary school students. However, the author hopes that students will have valuable experiences through participating in contests and feel a lot of excitement and pleasure in delivering formal talks in public.